

「……おはよう、コナン。今日も早いな。朝食はーって、なんと！ これは驚いたな」
翌朝。

寝惚け眼に寝癖も直さぬままりビングに入ったアーサーは、たちまち眠気を吹き飛ばして、瞳を輝かせた。

コナンは《Eソード》を構えたまま、気まずそうに「ノックぐらいしろ」とぼやいた。

「どういう風の吹き回しだい？ 君が自分から僕の発明品を振り回すとは」

「……昨日の件だ。ベリル嬢のお父上が犯罪に巻き込まれている可能性は無視できない。それも、コートや手袋の汚れを鑑みるに、暴力沙汰にも関わっているかもしれない」

「それで『調整』しているわけか」

「……ウイリアム・クラムのときは不覚を取ったからな」

コナンはテーブルに《Eソード》を置き、コホンと空咳を打った。

アーサーは、さも楽しげに、ニヤリと笑う。

「……さては惚れたかね？」

「なっ！？ 馬鹿を言うな！ 俺はそんなやましい気持ちなどー！？」

「冗談だ。どうせ、ステイプルトン家の姉妹愛に感じるところがあつたんだろ。ベリル嬢が健気な女性だったのは確かだしな。ひよっとして、お兄さんのことを思い出したのかい？」

「……少し同情したただけだ。いや、同情と言うとおこがましいな。ただ、依頼されたからには、力になりたい」

コナンは率直に言うのと、椅子を引き、どすんと座った。

アーサーも軽快な仕草で席に着き、さっそく煙草を取り出して、自作ライターでバチツと火を付けた。

「なににせよ、《Eソード》は修理した上、さらに改良を加えてる。存分に使ってくれたまえ。君のナイフ術はお兄さんから習ったんだっただな？ 勘は戻りそうかい？」

「勘も何も、こいつはナイフじゃない。同じようには扱えない」

「ご要望とあらば、すぐにも《Eナイフ》をー」

「いらんっ」

コナンはきっぱりと告げて、煙草をくゆらせるアーサーをにらみつける。

「そんなことより、どうなんだ、アーサー？ 依頼を解決する目処は付いているのか？」

「全然」

「全然！？ それも即答！？」

「人捜しは専門じゃないからなあ」

「何を呑気な……ベリル嬢はものすごく期待してたぞ？ ローラ嬢だって！」

「まあ、いよいよとなればレストレード警部を頼るさ。彼なら、ステイプルトン家の秘密に關しては、口止めもできる」

「そ、そうかもしれないが……」

「それより、魔物だよ、魔物。知的好奇心が刺激されないか？」

「はあ？ おい、アーサー。お前まさか、本気で魔物がいると思ってるんじゃないかな？」

「魔物の定義による」

「ふざけるな。現代医学の片隅に身を置く者として、そんな迷信は認められないぞ」

「まあそう熱くなるな。僕の推理が——いや、まだ予感の段階だが、ひよっとするとこいつは、まさに『僕の専門』かもしれないね。正直期待してるんだ」

「……期待？」

コナンは目を丸くした。アーサーが事件に「期待」するなど、前代未聞の珍事ではないだろうか。

生憎、嫌な予感しかなかったが。

「それに専門って……お前が悪魔祓いとは知らなかったぞ？ 教会にもろくに行かないくせに」

「僕の神は科学だからな。ただ……他の汚れはともかく、血痕というのは引つかかる。しかも、

夜遊びが始まったのが春先からとなると……いやしかし、さすがに因果関係があるようには…

…

アーサーがぶつぶつぶやきながら、大きく息を吸い、吐き出す。煙草の先がジリジリと燃

え、辺りに紫煙が漂った。

またしても、唐突に考え事に没入したようだ。

コナンはため息を吐きつつ、朝食の用意をすべく椅子から立ち上がった。

しかし、そのときだった。

ガンガンガンツと、ノックと呼ぶには乱暴な手つきで、リビングのドアが叩かれた。

「コナン君！ アーサー君！ いる？」

ハドソン家の次女、マリー・ハドソンだ。

アーサーが物思いから覚めた。コナンはやれやれとドアを開けた。

「マリー。『君』はやめろとー」

「そんなことより！」

部屋に飛び込んで来たマリーは、中央のテーブルに駆け寄ると、持っていた新聞を叩き付け

た。

「これ、速報！ 昨晚また『ジャック・ザ・ナイトメア』が出たわ！ 前回と同じく首が切断されてるし、被害者はまた『市民解放会』のメンバーなの。出番だよ、アーサー君！」

「落ち着け、マリィ。生憎だが、アーサーはいま別件で……」

そう言いかけたコナンを余所に、アーサーは素早く新聞をつかむと、食い入るように目で記事を追った。

「……不味いな」

と鋭くささやき、顔を上げてコナンを見据える。

「コナン。銀助を呼んでくれ」

「銀助か？ いやでも、あいつはいまロンドンにいないはずだ。神経の衰弱が酷いからって、湯治、だったか？ とにかく、先週からバスに行ってる」

「チッ。あの昼行灯、肝心な時に！ 滞在先はわかるか？ 電報を打つ」

アーサーは慌ただしく席を立つと、ハンガーに移動し、コートを手を取った。

マリィに向かつて、

「頼みがある。六日前の新聞を調べてくれ。どこかに『市民解放会』の寄稿が載っていないかどうか。あればその内容を聞きたい」

「へ？ あ、わ、わかったわ！ 六日前ね？」

「あと可能なら、『市民解放会』周辺に、不審人物の目撃情報がなかったか探ってみて欲しい。

これは五日前から昨日までの間だ。特に……そうだな。全身を隠した大男を見なかったか、どうか」

「大男？」

「ああ。ただし、あくまで可能ならだ。身の危険には十分注意して欲しい」

マリィが首肯し、慌ただしくメモを取る。

そしてアーサーは、ぼかんと椅子に座るコナンに、焦れた様子で「何をしている」と告げた。

「朝食と大学の前に、スコットランド・ヤードに出向くぞ。ひよっとすると、『こちら』の件に繋がる手掛かりがあるかもしれない。急げっ」

*

スコットランド・ヤードを訪れたアーサーとコナンは、さっそくクラウド・レストレードを捜した。

大抵、前夜遅くまで飲み歩いたため、クラウドが朝から本部にいる確率は高くない。が、この

日はすぐに見つかった。まさに新しい『ジャック・ザ・ナイトメア』の事件で、早朝から収集されているらしい。

二人の顔を見るとうんざりと唇を曲げ、

「……また『ちよっとした依頼』でもあったのか？」

「名推理だ、警部。『ジャック・ザ・ナイトメア』の最新の犯行に関して情報が欲しい」

「帰れ。いまこっちは忙しい」

「いくらこつそりでも、署内での飲酒は感心できないね。しかもまた、ずいぶん質の悪い安ジンド。どこでそんな……あ、ひよっとして押収した酒を……」

「案内しよう、こつちだ」

マリイが知らせてくれた通り、今度の被害者は前回の被害者と共通点があった。どちらも中年男性であることもそうだが、首が切断されていること、そして政治運動に関わる市民団体『市民解放会』に所属するメンバーであることだ。

クラウスが「あ……」と面倒そうに説明する。

「お前等にはいまさら言うまでもないが、連続して似た立場の人間が『ジャック』の標的になるのは珍しい。頭と身体を両断するなんて手の込んだ殺し方なもの、これまでにはなかった点だ。とはいえ、現場に置かれていた仮面は本物……お前に指摘された、視界がえらく狭いって点も合致してた。この前みたいな模倣犯って線は薄い……と、本来なら言いたいところなんだが……」

歯切れの悪い物言いに、コナンが「なんです？」と質問する。クラウスは苦い顔で、「そいつを見てみればわかる」と投げ遣りに返した。

アーサーは目の前の寝台……布に覆われた被害者の遺体を見下ろしていた。

それから、くるりと背中を向け、

「……では、コナン、よろしく頼む」

「お前は見ないのか？」

「見たってわからない。専門外だ。クソッ。銀助がいればな」

「銀助に見せるつもりだったのか？ あいつだって専門外だし、第一、断固拒否するだろ？ 卒倒しかねない」

「ニッポンではショーグンに逆らう者は皆、サムライソードでギロチン刑だ。生首や首無し死体なんて見慣れているさ」

「……そうなのか？」

まさかの野蛮さに、知らなかった、とコナンは真顔になってクラウスを見たが、警部はどうでも良さそうに肩を竦めるだけだった。

コナンはやれやれと遺体と向き合う。

朝っぱら食事も取らずに酷い話もあつたものだが、ともあれ、ここまで来たのだ。コナンは覚悟を決めると、死者への祈りを捧げつつ、そつと覆いを外して被害者の遺体を確認した。

いくら医学生とはいえ、首が切断された遺体を見るのはコナンも初めてだ。ただ、他に外傷がなく遺体の損壊もないため、出血の跡こそ激しいものの、想像したより綺麗な遺体だった。

考えてみれば、この被害者が殺されたのは昨晚。遺体は死後半日も経っていないのだ。他はまともなのに頭と胴体が繋がっていないので、まるで血染めのマネキンでも眺めている気がした。

もつとも、濃密に漂う死臭は、誤魔化しようがなかったが。

「……傷口はどうだ？」

「ああ……まさに、ばつさりという感じだな。だが、なんというか……異様に『綺麗』だ。断頭台で切断されたとしても、もう少し肉が押し潰されそうなものだが、頸椎まで綺麗に切断されている」

「市警^{うち}に出入りしてる医者も同じ事を言つた。実を言うと、前回の首切り死体も同じでな。医者の見解としては、動く相手を通り魔的に殺害したんじや、絶対にこうはならないってことだ」

「……同感ですね。先に相手を殺しておいて、そのあと鋭利な……たとえば外科用のナイフでも用いたとしか……けど、それじゃあ『ジャック・ザ・ナイトメア』の手口とは、かなり違つてくる」

「その通り。だもんで、捜査もなかなか進まなくてな。『ジャック』の野郎、今回に限ってなんのつもりなんだか」

クラウスはぼやきながら、やつてられないとばかりに葉巻を取り出し、マッチで火を付けた。

正直、捜査が進まないのはいつものことでは、とも思ったが、コナンは胸に秘めておくことにした。

一方、コナンが遺体を調べる傍ら、アーサーは隣のテーブルに移動していた。

「警部。こっちのテーブルにあるのが遺留品かい？」

「そうだ。例の仮面も置いてあるだろ？　せめてそいつがクロエ・ノートンのときみたいに偽物なら、模倣犯つてことで割り切れたんだがな」

クラウスは面倒そうに頭を掻いたが、アーサーはろくに見ていなかった。遺留品の中のステッキを手に取り、アイルーペを取り出して、入念に観察する。

「……この傷は新しいな……とはいえ、血痕の類はなし……」

つぶやきながらくまなく調べると、アイルーペをしまい、ステッキをテーブルに戻した。

それから、ふと、

「――警部。これは？ これも現場に？」

「ああ、それか。なんだかよくわからないが、犯行現場の側に落ちてたんで回収されたらしい。お前さん、そいつが何かわかるか？」

「……破片」

「あのかな？ それぐらいは俺だってわかる。裏に歯車が付いているから、何かの機械の破片かもしれん。お前さんの得意分野だろ？ なんの部品かわからんか？」

「……そうだな。確かにこれは……まさしく僕の『専門』分野だ」

クラウスの質問に対し、アーサーはなぜか、はぐらかすようにしか答えなかった。気になったコナンが遺体から視線を逸らし、隣のテーブルを見た。

アーサーが手にしていたのは、わずかに弧を描いたプレートだった。裏側に細かいパーツが付いており、壊れた歯車やワイヤーらしき物がぶら下がっている。なるほど、クラウスの言う通り、何かの機会の部品――その残骸のように見えた。ただ、コナンが気になったのは、プレートに施された塗装の方だった。

どこかぬるりとした黒い光沢は、つい最近――

「コナン。首の所だけ、隠しておいてくれ」

まるでコナンの視線に気付いたかのように、アーサーが言った。

コナンは思わず閉口する。

「……他人ひとにだけ見せるなよな。いいけど……」

小さく愚痴りつつ傷跡を布で覆い隠すと、アーサーは遺体に向き直り、さっそく頭のとっぺんから爪先まで入念に調べ始めた。

顔を近づけて遺体をにらみつつ、クラウスに問いかける。

「こっちはまだでも、前回の遺体は解剖済みだろう？ 『先に相手を殺してから』ということだが、首以外に外傷はない。とすれば、死因は？」

「……それが、何もなくてな。毒物は検知できなかったし、溺死、もしくは窒息死した痕跡もない」

「だろうな」

応えて、アーサーは遺体から身体を離れた。

改めて遺体の全身を俯瞰しつつ、

「出血の激しさから見て、死後切断したとは考えづらい。少なくとも、心臓は動いていたと見るべきだ。実際、出血は現場にも残されていたと思うが？」

「ああ。クロエ・ノートンのとぎとは違う。発見された現場にも、大量の血痕があった」

「とすると、麻酔はどうだろう？ 前の遺体から形跡は？」

「麻酔の種類によっては、そもそも検知できないからな。とりあえず、『何も出なかった』。アルコールの類も含めて」

「ふむ。では、検知できない何らかの麻酔で意識を奪い、その後首を斬ったのだと仮定しよう。犯人は犯行現場でそれを実行したことになるが……」

「そう。だが、そもそもそれが無茶だな？ 現場は路地裏とはいえ、少し歩けばリージェント街だ。深夜だろうと人や馬車は通る。しかも、今回の犯行は、夜とは言え浅い時間だ」

「犯行時刻はわかっているのかい？」

「ああ。前回の被害者はともかく、今回の被害者は殺害された時間が、かなり絞られてる。午後十時二〇分から四〇分の間だ」

「それはまたずいぶん詳しいな」

「被害者は殺されたメンバーを偲んで、仲間たちと酒を飲んで、その帰り道で今度は自分が被害者になったわけだが、飲んでいた仲間たちと別れたのが午後十時過ぎ。現場までの移動に、少なくとも十分。で、その後、解散した仲間の一人が、新たな被害者を発見したのが零時四〇分ってことだ」

「つまり、麻酔で眠らせるにしても、時間的余裕はさほどなかったわけか」

「即効性の麻酔なら不可能じゃないかもしれないが、場所が場所だ。現実的とは思えない。まあ、それを言うなら、そもそも街中で首を切断すること自体、現実的じゃないんだが」

葉巻を吸いながら、やれやれとクラウドがため息を吐く。

確かに、そんな状況で成人男性の意識を奪い、裏路地で、もしくは裏路地に運び込んで首を切断するとなると、相当難しいだろう。見つかる可能性が高いし、第一、意味がわからない。もつとも、いまのところ「意味がわかる」ことの方が、遙かに少ないのだが。

しかし、

「確かに『現実的ではない』ーが、状況だけ見れば、典型的な『ツジギリ』と言えるな」

アーサーがぼそりと言った。クラウドが顔をしかめ、「なんだって？」と聞き返す。コナンもよく聞き取れなかったのだが、アーサーはそれ以上なんの説明もしなかった。

「コナン。そろそろ大学の講義が始まる時間じゃないか？」

「それはそうだが……」

「とりあえず、昼間から次の犠牲者が出るとは思えない。大学が終わったあとベーカー街で合流しよう。警部。新しい方の現場を教えてください。そちらの調査を済ませておきたい」

*

午後になってベーカー街に戻ったコナンは、待ち構えていたアーサーに連れられ、椅子に腰を下ろす間もないまま、ステイプルトン邸へと向かわされた。

「ホームズさん、お父様は？ 見つかったんですか？」

「ローラ！ いきなり失礼ですよっ」

屋敷ではステイプルトン姉妹が出迎えてくれた。

しかし、アーサーは挨拶もそこそこに、

「電報は受け取って頂けましたか？」

「は、はい。可及的に速やかにと言うことでしたので、いまでも屋敷の者に記録を探させています」

「結構。それでは地下の物置を拝見したい」

「畏まりました。こちらへ」

どうやら、訪問するより先に連絡していたらしい。四人は廊下を奥に進み、暗い階段を地下に降りる。

階段の突き当たりには、両開きの扉があった。地下室はその一室だけのようだ。

ベリルはさっそく扉を開けようとしたが、

「待って下さい」

アーサーが制止し、まず自分が前に回った。

薄暗い中、扉と床、壁、階段などを、目をすがめて見回す。

「……ミス・ステイプルトン。物置の出入り口は、ここだけですか？」

「はい。出入り出来るのは、この扉からだけです」

「妙だな……いや、あとにしよう。開けて下さい」

アーサーの指示でベリルが物置の鍵を開け、扉を開く。

コナンは中を見て驚いた。物置と聞いて想像していた印象に反し、地下室は応接間のように整えられていたのだ。

多くの物が収納されているが、それらはまるで博物館か何かのように見栄え良く飾られている。

そして、それがよくわかるほど、地下室は明るかった。

アーサーが我が意を得たように笑い、

「なるほど、明かり取りか！ ミス・ステイプルトン。あの窓……かなり大きい窓ですが、あれは嵌め殺しですか？ それとも開閉が可能？」

「ええと、確か開けられたはずですよ。もつとも、あくまで空気孔代わりと言いますか、あそこから出入りするための物では……」

「本来はそうでしょうね。一昨日屋敷の外を見た際は気付かなかった。とすると、あの窓があるのは周りが植え込みに覆われた位置で、僕の記憶だと、すぐ隣がローラ嬢の私室だったと思えますが？」

「……そ、そうですね。そのはずですよ」

ベリルは天上の隅にある明かり取りの窓を見上げ、家の配置を思い起こしながら答えた。アーサーは窓の下に歩みよると、すぐ側の壁をにらみ、さらにはアイルーペを取り出して床に這いつくばった。

ステイプルトンの姉妹は呆気にとられている。コナンなどはすっかり慣れてしまったが、これが普通の反応だろう。

「アーサー？ 何かあったのか？」

「あったとも。芝生と同じ『足跡』だ。何度も衝撃を加えてるんだろうな。幾つも、また外より余程くつきりと残っている」

「それは確か、お前が言っていた、魔物の痕跡のー」

コナンが口を滑らせると、耳にしたローラが小さな悲鳴を上げた。妹だけでなく、ベリルも目の色を変えている。

「どう言うことですか、ワトソン様？ まさかホームズ様は、本当に魔物を？」

「いや、実は俺も詳しい事はー！？」

詰め寄られて焦る相棒を余所に、床から立ち上がったアーサーは、口笛でも吹き出しそのような機嫌で物置の中を見回した。

「なるほど、入り浸っていただけあって見事な陳列だ。過去の栄光か。そしてやはり、ニッポンの物が多い。この大皿なんか、好事家が見れば涎を垂らしそうだ。これは掛け軸かな。年代物だ。そしてー何よりありがたいことに、丁寧な陳列のおかげで、

何がなにかが、一目瞭然だ」

そう言って、アーサーは様々な物が飾られる中、ぼかんと開いたスペースの前に立った。

空いたスペースから天窓の下までを振り返りつつ、

「ミス・ステイプルトン。ここに飾られていた物がなんだったかわかりますか？」

「……いい、いえ。父が入り浸るようになってから、物置には誰も近寄らなくなっていたので」

「では別の質問を。陳列されている中には見当たりませんが、ご当主はーいや、先代の当主、貴方のお祖父様は、ニッポンの鎧兜を所有されてはいませんでしたか？」

「鎧兜？ 甲冑ですか？ でしたら、ありました。覚えています。大きな木箱に……あ、ちょうど、いまホームズ様がいらっしやる奥に、木箱があるでしょう？ その中にしまわれていたはずですよ」

それを聞くと、ただちにアーサーは――断りもなく――木箱を開ける。そして、

「うん。やはり、空だ」

「え？　で、では、父が売却したのかもしれませんが。歴史的に価値がある物だと聞いていますのよ」

「いや？　売却はしていないはずですよ。残念ながら」

最後のひと言が、嫌に不吉に響いた。

もっとも、アーサーは気にした様子もなく、空っぽの木箱の中をアイルーペでつぶさに観察する。ただ、なんの手掛かりもなかったのか、つまらなそうに蓋を閉め直した。

しかし、締め直した蓋の表側、その隅に、短冊のような紙が貼られているのに気付き、おつ、と目を輝かせた。

短冊には、蛇がのたくったような黒い模様が描かれていた。アーサーはすぐに懐から一冊の本を取り出した。

見たことのない、変わった装丁の本だ。アーサーはその本の表紙と短冊に書かれた模様とを、真剣な眼差しで見比べた。

「……見つけた」
エウレカ

小さく小さくアーサーは、いつになく瞳をギラつかせていた。コナンは我知らず生唾を呑み込んだ。

「……おい、アーサー。いい加減に、説明しろ。お前は一体、何を調べてるんだ？」

「何をって？　決まってるさ。もちろん――」

瞳を輝かせたままコナンを振り返ったアーサーは、しかし、突然語尾を途切れさせた。

アーサーの眼光が鋭さを増す。視線はコナンに向けられていた――と思ったが、違う。まだ扉の側に立っているコナンの背後、階段の方に向けられていた。

すると、

「……お嬢様。言い付けられていました記録が見つかりました」

階段から一人のメイドが降りて来た。

ベリルは、メイドから紙の束を渡されると、「ホームズ様」と声をかけた。

アーサーは無言でベリルの側に戻ると、紙の束を受け取り、素早く視線を走らせた。

「ホームズ様。こちらで間違いありませんか？」

「……まだわかりません。これで全部ですか？」

アーサーが問いかけると、ベリルはメイドに視線を向ける。メイドは小さく頷いた。

「見つかった分は、これで全部でございます」

「……見つけたのは貴方？」

「はい」

「なら……結構。信用できそうだ。これで勝負に出てみよう」

アーサーはじつとメイドを見据えたまま、そう言った。なぜかその台詞は先ほどまでと違い、妙に上の空で口に行っているように聞こえた。

もつとも、コナンはそれどころではない。最後のひと言に、またしても嫌な予感を――急速に――募らせた。

「勝負？ 待て、アーサー。お前、何と戦うつもりだ？ まさか……」

口では「まさか」と言いつつも、自らの予感が「まさか」ではないだろうことを、コナンはすでに察していた。

果たして、振り向いたアーサーは当然の如く不敵に笑う。

「ローラ嬢の依頼を遂行しよう。魔物退治だ」

*